

転生者が斬る！

草バエル

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

交通事故で死んでしまったはっちゃんは女神様の都合によって異世界に転生させられてしまう。

すぐに死なれては困るということで英雄の力を一部行使できる能力を手に入れ、帝都を生き抜く。

目次

リスポーン	1
八年後のはっちゃん	8
初任務	15
臣具	20
プトラ遠征 一日目	26
プトラ遠征 二日目	32
大規模任務決行	39
報い	44
迷い、決断	51
リストアト	56

## リスポーン

——貴方のあだ名をお答えください。

あだ名？えつと……、

はっちゃん、かな。

——貴方の死因を覚えていますか？

死因……。

……は、死因？

あれ、たしか俺って……。

少し前のことを思い出す。

一時間前、ご飯がないからスーパーに買出しに出た俺は貧血気味だったこともあつて道路で倒れた。

そこからの記憶が曖昧で……。

「……俺、死んだのか？」

しかしなぜ？

……いや、道路で倒れたから事故死が妥当か。

「信号無視の最中、ということさえなければ可哀想と思えるのですがね……。」

「……へ？」

背後から美少女の声がしたから振り向くと、そこにはザ・大和撫子と言うべきなほど美しい女性がいた。

服装がリーマン風じゃなければ女神様と思えるのだが、これじゃあただの美人OLだ。

「……何か失礼なこと考えませんでしたか？」

「いえ、何も考えていませんよ？」

心を読まれたと思って瞬時に笑顔で嘘をついた。

……いや、これ嘘ついて地獄行きとかないよな？

「ゴホン……。たしかに貴方は死んでしまいましたけど、本来ならば貴方は九十〜百の間に死ぬことが確定していました」

その証拠とでも言わんかのように分厚い辞書のような本を見せてくる。

……たしかに俺の顔と名前、生年月日は合っているし、死ぬのも今ではなさそうだ。

だが、現に俺は死んでしまっているわけだし……。

「最近多いんですよ、貴方のように死ぬ時期よりも大幅に早く死ぬ人が。そうなるにあの世も定員オーバーになりかねないので困るんですよ」

「そんなこと言われても……死んでしまったのにどうしろと?」

「こちとらもつと生きられるはずなのに死んでしまったなんて聞かされていい思いはしていない。」

「自業自得と言われればそうなのだが、このOL風の人にそんな嫌そうに話される筋合いもない。」

「……そこです、貴方には一度転生をしてもらって今度こそ死亡時期までしっかりと生きてほしいんです。今のままだとニート気味な普通の学生という判断材料しかなくてどちらに送ろうか迷いますから」

「迷うぐらいなら天国に連れてってほしいんですけどね……」

俺の言葉を無視するようにOL風の女性は資料のようなものを取り出した。

……ほんと、あの世って感じしねえな。

「貴方には、元いた世界よりも過酷で異能力といってもいいものが存在する世界に転生してもらいます。名前はあだ名がはっちゃんなのでハチです」

「あだ名聞いた理由そういうことか」

「おおよそ元いた世界の名前を使うことが許されてないとかそんなところだろう。」

でも、それなら多少嘘ついてでもカツコよさそうなあだ名にしてカツコいい名前にしてもらったほうが良かったなー。

「それと、今のままじゃ死ぬ確率のほうが高いから一つだけ能力を授けるよ」

「おおーマジっすか!?!」

なんだか本格的に異世界に転生する数分前みたいになってきて心

が踊る。

魔法とか使えたりするのだろうか？

あるいは強い剣士になったりして。

「手の甲を見なさい」

「手の甲？」

確認してみると凄く見覚えのある紋章があった。

間違いようもないくらい fate シリーズでおなじみの令呪だ。

見た目はジークと同じようにも見える。

「もしかして、俺が誰かのマスターになれるんですか!？」

「いいえ、それじゃあ貴方が弱いままじゃないですか」

それもそうかと一歩退く。

だが、それならなんで令呪なんて……

「……え、まさか……これが妙にジークっぽい令呪なのって……」

「はい、詳しいことは転生地点に説明書を置いてありますので」

それだけ言うとOL風は杖を取り出して謎の結界を俺の周りに張った。

……てか、よく考えてみると転生場所ってそんな力が必要な感じの世界なのか？

まだ転生すらしていないのに不安要素しかない。

本当に大丈夫なのだろうか？

「今度こそ死亡時期まで生きてください。今回もそれよりも早く死ねば問答無用で落としますから」

「嘘だろおい……」

OL風からの追い打ちでもう絶望しか感じない俺はそのまま光の中に包まれていく。

これが転生する時の感覚なのだろうか？

例えるなら大きなタワーのエレベーターで下に降りる時のなんかフワツとするような感じだ。

あれがずっと続く感じでなんだか気持ち悪い。

……

.....

.....え、待ってこれいつまで続くの？

ちよつと長すぎる気がするんだけど？

待って怖い怖い怖い。

怖い……つてか気持ち悪い、そろそろ吐きそう。

嫌だぜこんな訳分からん空間で一番最初にゲロった人間になるとか死んでも御免だ。

いやほんとそれだけはマジ勘弁。

もうダメだ、じつとしてたらいつになるか分かったもんじゃない。

どうなっているのか分からないが、兎に角バタバタと体を動かしてみたり走ってみたり飛んだりしてみる。

それを繰り返してよいよ限界にきそうになった頃だった。

「……ぶぼぼっ!!」

突然妙な空間が消えたかと思えば、今度は水の中にいた。

溺れそうになりながら必死に光を目指して上がる。

「——ぷっはあ！」

やつとの思いで外の空気を吸うと、そのまま疲労も重なって水の中で吐いた。

そんなこんなで俺の死闘も終わって数分が経った。

「ぶえつくしよい……うう、寒い」

ここはどこかの草原にある川付近で、時刻は分からないが既に日は沈んでいる。

まあそこまでは普通だ。問題は……

「……なんで子どもの姿になってるんだよ」

そう、体が完全に子供なのだ。

まさか幼児化するなんて思ってもいなかったし、この体は何かと不便すぎる。

「……とりあえず、説明書を探すか」

適当に近辺を探してみる。

人の気配が全くしないことから近くに人が住んでいないことが分かる。

「……お、あれか？」

そこにはOL風が置いたであろう、松明に囲まれたかなり特徴的な箱があった。

中を開けてみると服とタオルと本が入っている。

「これは……この世界の服か」

水の中にいたからかなり冷たくなっていた服を脱ぎ捨ててタオルで体を拭き、それに着替える。

松明の明かりで体も暖まり、風邪の心配はなくなった。

そして、例の本を読み始める。

内容としてはOL風の正体が女神であること……まあこれは別にどうでもいいな。

この令呪はジークと似た特別な令呪であること。

令呪は使うと一画消費するが、翌日に一画回復すること。

変身時間は頑張れば一時間は維持できる。

変身は体を蝕まれない代わりに何に変身するかは全くのランダムで宝具と一部の身体能力しか具現化出来ないこと。

具現化出来ないもの一つとして魔力があるが、魔術を使い続けると増えていくようにしたから最高は頑張ればEXまで上げられること。

「……まあなんとなく理解は出来た」

とりあえず今キヤスターにでもなったらほぼ負け確だな。

この本に俺のステータスが記載されていたが、案の定全部Eだ。使える魔術はおそらく強化魔術だろう。

今から魔術の修行はしておくとして、筋力とかはどうやって上げようか。

トレーニングルームとかあると嬉しいけど、そんな美味しい話もないよな。



「まだ生き残りがいたのか？」

一瞬で全身が凍りつくほどの寒気を覚えた。  
体を起こして逃げようにもビビってしまつて体が動かない。

「これはダメだな。なら……」

禿げの男が注射器のようなものを取り出した。

……まずい、嫌な予感しかしねえ！

「——れ、令呪を以て我が肉体に命ずる!!」

男の持つ危ないものがギリギリまで迫っていた時だった。

剣を振り、それを弾き飛ばす。

小柄な身ながら白きマントをなびかせ、手に握るは決して壊れることのない剣。

——シヨタランスロットの誕生だ。

「……って、これじゃあ夢幻召喚イニストールじゃねえか!!」

もう姿の見えない女神に対して俺はツツコミを入れる。

……まあ、女性サーヴァントになったら俺がかなり困るしこれはこれで良かったと言うべきか。

「姿が変わった……!？」

「ああ、くそ！ 兎に角、何も分からず死んでたまるかあ!!」

アロンダイトを戻し、宝箱を宝具化させて殴りつける。

無窮の武錬の能力もあつてか一撃で気絶に成功できた。

「……てか、早速一画使っちゃまったな。頑張れば一時間は保てるって書いてあつたし早く戻らねえと」

前に進もうとしたところで、急に変身が解ける。

……嘘だろおい、三分も変身出来ねえのかよ。

そのまま意識を失い、倒れてしまった。

「突然だがこいつも強化組になった。ほら、挨拶しろ」

「…………えっと、ハチです。はっちゃんとも呼んでください  
…………どうして、こうなった…………!!?」

## 八年後のはっちゃん

「突然だがこいつも強化組になった。ほら、挨拶しろ」

「……えっと、ハチです。はっちゃんとも呼んでください」

「……どうしてこうなった？」

時は遡り、俺が気絶してから多分一時間ほど過ぎた時だった。

なんとか意識を取り戻した俺は目の前の禿げをどうするか迷った。  
迷った結果……。

「危ない組織と関わりあいにはなりたくないな。うん、知らね」  
全速力で逃げた。

俺は無関係だ、何も見てないと自分に言い聞かせてここから出よう  
と思っていた。

……思っていたんだ。

「おいてめえ」

あの禿げの時とは比べたくもないほどの殺気を感じ取る。

奥から出てきたのはたった一人の男だが、その威圧は半端ない。

人間は真の恐怖と出会ってしまった時、こんなにも体が動かなくなるものだと初めて知った。

「どこから入ってきた？ 場合によっちゃ……」

剣を抜いて、マジで殺す数秒前な野郎から逃げる方法……ないな。

でも、だからといって勝てるのか？ ランスロットのような当たりを  
引けば勝てる可能性はあると思うが……。

……一か八か。

「——令呪を以て我が肉体に命ずる!!」

本日二度目の令呪を使い、変身を行う。

その結果……。

「許してください俺はただの迷い人なんです。ちよつと力があるから調子に乗ろうとしてた雑魚なんです!!」

それはもう綺麗な土下座をした。

アンデルセンでどう勝てと言うんだ?無理だ。

「とりあえず敵なら始末するに限るが、その前に……そいつは帝具か?」

「て、帝具……?」

この世界での宝具と同じ意味なのだろうか……?

とにかく、ここは正直に話していくしかないか。

「ち、違います。これはなんとというか……俺の特殊能力とでもいいいますか……」

「……ほお」

「あ、ちなみにですね。この姿でしたら貴方様を強くできたりもしますよー?」

危ない野郎は敵に回すな。

これ、絶対のお約束。

「……妙なガキだ。だが、それは気になるな」

「この本を白紙にして俺が執筆することで、その人を成長させるっていうものなんですよ!」

媚は売り、何としてでも生き残る。

ちなみに、俺には本書きの才能なんか皆無だし魔力もねえからアンデルセンは正直いってハズレすぎる。

間違つても次回から引きたくないサーヴァントの一人だ。

「……なら、俺のことを書いてみる。使えそうなら考えてやつてもいいぜ?」

「りよ、了解です!!」

死にたくない、頼むから宝具よ発動してくれ。

そんな気持ちで、ただ一心不乱に宝具を発動させた。

「――ではお前の人生を書き上げよう。タイトルはそう、『メルヒェン・マイネスレーベンス 貴方のための物語』だ!」

……まあ、そこまではどつかの主人公みたいな展開になっていた気がする。

だが、宝具を発動して間もなく変身が解けて今度こそ死ぬと思っていたのだが……。

「少なくとも敵じゃねえことは分かった。利用価値は高そうだ」

それはもうわっつるい笑顔で俺を助けた。

あの無様な姿のどこに利用価値を見出したのか分からないけど、死ぬことだけは免れて……。

現在に至る。

「それと、上は投薬による強化を考えていたが、責任者が不在だから急遽俺がてめえらを鍛えることになった」

この男が俺たちの教官。

あの時のヤバい男は選抜組とやらのリーダーらしい。

そして、強化組と言われた俺たちのメンバーは……

お姉ちゃん大好きっ子と思われるクロメ、

見た目が気弱そうなこう……萌えが刺激されるレムス、

レムスとは真逆そうなお姉さん系のギン、

委員長系のウーミン、

そして、イケメンでいかにも主人公っぽい感じのナタラ。

俺たちのやることは罪人の処刑と後々に暗殺もおこなうらしい。

……この世界は俺のもといた世界とはかなり違う、慣れなければ俺が死ぬ。

「まず朝にこのメニューを一通りやる。そのあとに罪人の処刑、最後に俺との模擬戦だ」

朝から猛特訓だ。

運動部がよくやるような基礎トレをバカみたいにやらされた後、重すぎる鎧を着せられて川を泳がされ、暗部ということで気配を殺す練習を朝の間にやらされる。

これを一通り終えるまで連帯責任で皆飯は食わせてもらえない。

基礎トレは強化を使って身体能力を上げていたらなんとか少し遅いぐらいのペースでやることは出来た。

だが……

「さっさとしろボンクラ二人!!」

「無理無理無理無理!」

「が、頑張りましょう!はっちゃん!」

ああ、やっぱ可愛いなーレムスは。

……でも、そのレムスも俺よりは先にいるんだよなー。

どうにも今の強化じゃこのクソ重い鎧を着ながら軽々と泳げはしないようだ。

「ま、負ける、かぁ……!!」

やつとの思いで泳ぎきった時には疲労がたまりすぎて食べ物を胃が受け付けないという状況に陥ってしまった。

教官は無理矢理に食わせるためにお粥を作ってくれたが、皆がこいつ本当に大丈夫なのかっていう哀れみの視線を向けてくる。

なんとか昼に気力を少し回復出来た俺だが、昼の罪人の処刑でまた吐いた。

言ってしまえば、この仕事は人を殺すことを目的としたものだ。

生前人殺しをしたことのなかった俺にとって初めての殺しは後味が悪く、何度も吐いた。

だが、教官はそれで休むことを許さずにすぐに模擬戦をおこなった。

「お前の動きは素直すぎる。そんなんじゃあ当たらねえぞ!!」

「きやあ!?!」

教官は基本的に集団戦での戦い方を教えてくれた。

曰く、一人で戦っても今の俺たちじゃ使い捨ての駒にしかならないということとで集団で戦うための基礎を徹底して教えた。

「ウーミン!くっ……」

「ハチ、お前はその力に頼ることなくまともに殺れるようになれ」  
「……っ!!」

俺は、その言葉通りに一度も変身をする事はなかった。

元々この力に過信するつもりはなかったが……やっぱり強い力つていうのは無意識に過信してしまうようだ。

そうして俺たちは教官に挑んでは負け、挑んでは負けを繰り返した。

それが八年も続いた。

結局投薬の責任者が帰ってくることはなく、風の噂では危険種……凄く強い獣に殺されたらしい。

まあ、転生して早々ヤク漬けの人生なんて死んでも御免だ、そんなものにはなりたくない。

「やれ」

「くっ、こんな子供が……」

「国を乱す反乱軍、……せめて安らかに眠れ」

そう静かに言い、目の前の男を斬り捨てる。

八年間も処刑を続けていたら次第に人を殺すことにも躊躇がなくなった。

人格破綻者になったわけではない。

ただ、ここは日本ではないのだと割り切ることが出来るようになってただけだ。

「あっ!？」

「ボンクラ！そいつ仕損じてるわよ!!」

「……はあ、掃除確定か」

あの説明書にあった俺のステータス欄は最新のものに更新されるらしく、最近確認してみたところ魔力はC、それ以外はDにまで上昇した。

これで脱一般人は出来たとはいえ、おそらくこれ以上のステータスを望むのはかなり不可能に近いだろう。

「レムスが仕留め損ねた。連帯責任で刑場を掃除しておけ」

「……はい」

それと、これは数年前に分かったことだがどうもこの国は腐っているようだ。

かなりの数の反乱軍が処刑されている現状をおかしいと思い、個人的に調べあげた。

すると、この国の皇帝を裏で操るオネスト大臣が悪の権化のようだ。

この訓練もいわゆる洗脳教育の一環なのだろうが、革命の際はいつでもオネストの首を狙えるようにしておかなければならない。

「はっちゃん、そろそろ初任務らしいけど大丈夫?」

「……ナタラか、正直緊張はしてるよ」

この八年間、教官との約束通り魔術は使っても変身は使うことがなかった。

今回の初任務は変身を使うつもりだが……今ならキャスターでもある程度戦えるだろうか。

「そういうお前も少し緊張してるな。つたく、教官も編成するなら男女均等にしてほしいよな」

「元々はっちゃんがいなかったら俺一人だったんだ。はっちゃんがいてくれるだけ有難いよ」

あーくそ、本当こいつイケメンだよな。

こんな世界じゃなけりや相当モテたに違いない。

てか、俺がホモなら惚れてるな。

ホモじゃねえけど。

「と、こ、ろ、で、さあ? 八年も経って俺たちの班って皆美少女揃いになつたよな?……誰がタイプだ?」

「は、はあ!!? な、なんだよいきなり……」

ギンに睨まれてこっりと二人で床を掃除する。

「大声出すなよな? こんだけ長くてキュンつとかする奴いるだろ?」

「そうは言っても……」

こんなイケメン主人公風なナタラだが、これがかなりの草食系男子でいよいよ何かの作品の主人公じゃないのかと思わせる。



これで鈍感系なら殴つているところだがそういうのは多分問題なさそうだ。

「かくいう俺も皆が美少女だから選ぶのに困るけど、ウーミンとかかなりタイプだ」

「あれ、レムスじゃないのか?」

「レムスはなんつーか……最近妹って感じなのかなーって思い始めてな」

前なら可愛い〓好きとか考えていたが、今なら可愛い妹を持つ兄の気持ちになると言つてたアニメのキャラの気持ちが分かる。

「……分かる気はする。なんていうか、放つておけないもんな」

「そうそう。今回の任務でも仕留め損ねないか心配だぜ」

……初めての任務。

選抜組は誰一人欠けることなく成功させた。

殺らなければ殺られる。

もう天国になんて行けない。

なら、せめてこの国のために出来ることを精一杯やってやる。

そして、ここにいる仲間を守ってみせる。

それが、俺の進むべき道だと信じている。

## 初任務

夜、俺たちの初めての任務が始まった。

敵は帝都近隣の村に潜んでいる異民族のスパイ。

他のチームが追い立ててあぶりだしたやつらを始末するのが俺たちの任務だ。

皆覚悟は出来ていた。

俺たちに臣具がなくても、帝具がなくても戦えるようにするためにこの八年間必死に修行してきたのだ。

「……ギン、手が震えているよ」

「ふん！武者震いって言葉を知らないの？ボンクラ！」

「え、ギンも武者震いするの？マジで!？」

「私をなんだと思ってるのよ、クソボンクラ！」

クソボンクラって、ボンクラがグレードアップしてません？

まあ、緊張するのも分かるがそれで本来の実力が出せないというのも問題だ。

ここは、年上として落ち着かせてやろう。

「じゃあ落ち着くためには、吸ってー、吸ってー、吸ってー、吸ってー」

「スーーーーー……って、吸ってばかりじゃない!!」

そんな冗談を少しやっていた時に、足音が聞こえる。

もう少しバカをやっていたかったけど、さっそく敵のお出ましというわけだ。

「来たか、ここは通させはしない!!」

ナタラが先頭に立ち、その後ろにクロメ、ギン、ウーミン、レムス、最後に俺と走っていく。

敵は数が多いものの動きには無駄がある。

これならば、油断しなければ今の俺たちなら勝てる。

「一人で無理に戦おうとするな！二人一組でやるぞ!!」

ナタラが目の前の大男の剣を難なくかわして瞬時に首を斬る。

それを合図にそれぞれが二人のチームで分かれていく。

一人で倒せない時は二人で、二人でダメなら三人で、それでもダメ

なら撤退を。

初めての实战で学んだことを忘れそうになっている俺たちでも、視野を広くして周りを見ることだけは忘れはしない。

周りを見ることはお互いを助け合うことにも繋がるからだ。

「動きが行儀良すぎるよウーミン！」

「すみません！後ろは任せました！」

「ボサっとしてると最初の死亡者になるぞボンクラ!!」

「助かった！このまま一気に叩く!!」

クロメはウーミンを、ギンはナタラをサポートしながら次々と敵を斬り捨てていく。

俺もレムスと一緒に仕留め損ねた敵に止めをさしていく。

「こ、これなら私たち全然生き延びられるよー！」

レムスが油断していると後ろの男が起き上がり、剣を構えた。

でも、それを仕留めるのが俺の仕事なんだよ。

「また仕留め損ねたな。教官の訓練じゃねえからもう少し踏み込んでみる!!」

起き上がった男を斬りつけて今度こそとどめを刺した。

悪いけど、俺にも守らないといけないやつがいるんだよ。

「ご、ごめんねはっちゃん！」

「……つたく、次からは気をつけろよ？」

頭を撫でてやり、妹のように扱う。

すると頭をブンブンと振って「子供扱いしないで！」って叫ぶ。

てか、戦場だつてのになにやってんだか俺たちは……。

敵は殆ど始末したらしく、残りは奥の方に下がった三人のみ。

「な、なんだこいつら!!」

「さっきのガキどもより強え!!」

さっきのより強い？

……まさか、他のチームは既に死者が出ているのか？

「答えろ、そのガキを何人殺した」

「……教えると思ってるのか？」

あいつらが劣勢のはずなのに妙に強気だ。

すると、後ろから更に敵が現れる。

その数は三、四……おいおい、何人いるんだこれは。

他のチームは殆ど全滅か？

「少し数が多いな。ここは後ろを取られないように円になって戦うか？」

「いや、そんなことしてもすぐに陣形を崩されるのがオチだろ。……俺が敵の数を削ぐ」

このままじゃ時間がかかるうえに死亡確率が高くなると考えて、変身することを決めた。

「令呪を以て我が肉体に命ずる！」

ランダムというのが本当に厄介だが、サーヴァントという存在の大半がどれも化物クラスだ。

アンデルセンやシェイクスピアでも無い限り今ならある程度は使いこなせる。

「……この槍は」

手に持つは二つの槍。

俺の知る二槍使いで、槍の長さが二つとも同じなのはあの英霊しかない。

「その分、戦える時間も短いだろうな」

槍を構え、一人大勢の敵の前に立つ。

余裕の笑みで武器を構えているが、どれも隙だらけだ。

「はっちゃん！一人でも無理に突っ込んではいけません!!」

「ここは集団で……!?!」

ウーミンとクロメの言葉を無視して一気に攻め込む。

長くて三分、それまでに敵をあいっすらで倒せる程度には減らさないといけない。

「一方的な殺戮というものを教えてやろうか……!」

瞬時に敵の懐に飛び込み、まず目の前の敵を突き殺す。

そうして動揺した近くの敵にゲイ・ボルクで投擲をおこない、もう片方のゲイ・ボルクでその右のやつを突き殺して二槍とも回収する。

それを見た敵が瞬時に危険だと察して一人が何かを指示して配置

につこうとする。

だが、紛い物とはいえスカサハの前でそんな隙を見せればそれまでだ。

「この、バケモノめ……!」

「囲め! 数で倒すんだ!!」

「……数で倒せると思ってんならおめでたいな」

俺を狙ってきた奴らが無数の槍で突き殺す。

学んだのは剣の使い方だけじゃない。

あらゆる英雄を扱う上で必要となる様々な武器を手に取り、訓練を積んできた。

初歩的なことさえ分かっていたら英霊の力を扱う上であまり支障をきたさなくなる。

「蟻が何匹群がろうが勝てるわけねえだろ」

残りは十人程度。

ゲイ・ボルクを使えば全滅も難なく……。

「——つくう!」

突然の激しい痛みと共に変身が解けていく。

どうやらスカサハの力を扱うのはここまでが限界のようだ。

これでもかなり削ったけど、まだ数が多い。

「……その力のことは後で聞かせてもらおうとして、今は休んでて」

「ざっと敵は十人程度、俺一人休むわけにはいかねえだろ」

剣を握り、再び立ち上がる。

まだ動ける、意識もしつかりとある。

地獄のような修行に比べればまだまだ余裕がある。

「行くぞ!! 全員で生き抜くんだ!」

残りの敵も覇気に負けたのか動きがかなり鈍くなり、それを斬るのに苦戦はしなかった。

初陣にしては敵の数もかなり多く、俺たちも息が上がった。

「こいつで……終わりだあ!!」

それでも、初陣で誰たちのチームが死ぬことなく生き残れた。

全員が無事に生き残れ、大きな傷もなかった。

これを圧勝と呼んでもいいと思う。

「……無理、疲れた。ナタラ、肩貸して」

「はいはい……。それにしても、はっちゃんがあんなの隠し持ってたなんてな」

人が疲れきっているっていうのに、皆が俺に休む時間を与えてくれない。

皆若くて元気だなー、俺はもう精神年齢だけいえば二十歳はとつくに超えてしまったからおじいちゃんだよ。

人間二十歳超えたあたりで皆の若さが羨ましくなる生き物になるんだと思う、多分。

「隠してたわけじゃないんだ。教官から任務の時以外にこれは使わなつて言われててさ」

「でも、そんな力があるならエリートに上がれるんじゃないの?」

「んなことないさ、基礎能力はまだまだ負けてるところが多いからな」

「……あー」

「皆納得したのはいいんだけどそんな「あ、たしかにねー」を棒で表した感じになるのやめてくれねえかな!」

こんなバカみたいな話を、いつか戦場という地じゃなくて帝都の安全な土地で出来るようになればどれだけ嬉しいか。

このまま全員生きて幸せになれるのならどれだけ理想か。

だが、俺たちにあるのはハッピーエンドではなく、その大半は……、

「……今回の戦績だが、無事に全員生還出来たのはお前たちを含めたつたの二チームだけだ。その大半は負傷、死亡した」

報いによる死だ。

## 臣具

初任務で全員が無事生還出来たチームは俺たちの他にもうチームムしかない。

他は負傷、死亡者をかなりの数出してしまったらしい。

「その生き残ったチームは投薬による強化を行っていたチームだ。もしかすると今の責任者がこれを機に全チームにも投薬を強制するかもしれない」

「ま、待ってくれ！投薬って……そんなものがなくても俺たちは戦える!!」

この世界は割と元いた世界の過去の歴史と似ている部分もある。

投薬による強化なんてこの世界じゃ聞こえはいいかもしれないが、おそらくその副作用も半端ではないはず。

「……でもな、上が投薬を行うことを決定すれば俺たちは逆らえねえんだ」

教官の言葉に俺は言葉を失う。

教官だって今の責任者よりは地位が低い。

その責任者の命令があれば黙って受け入れるしかないのだ。

俺たちに、拒否権はない。

「……とはいえ、今の責任者はまだ就任してから日は浅いつていうのと前の責任者ほど支持はされてないから発言力は低い。お前たちがミスしなければ暫くならあっちも強行手段は取らないはずだ」

「つまり、私たちがこれからもずっと生き延びれば大丈夫なんですよね!」

レムスがなら問題ないですよねとでも言わんばかりに大きな声で言うが、おそらくそんな簡単な話じゃないはずだ。

そして、それに一早く気付いているのはクロメ、ナタラ、ギンだろ

「いいや、投薬による人体実験は今後の強化人間を作るうえで必要になる。俺たちをモルモットにするために色々手は出してくるはずだ」

「……ほんとハチはそういうことに関しては知識がありすぎるってか、子供っぽくないよな。どこでそういうの学んできやがった？」

教官は否定することなく、上がどんな手でも使ってくるかと肯定した。

ナタラたちもそれが何を意味するかは分かっていただろう。

「……エリートに及ばないならせめて投薬でっていうのが強化組だ。つまり、エリートと互角の実力が出せるなら俺たちも昇格出来て責任者は口を出せなくなる」

教官が唯一の薬の強化を免れる方法を提示したが、たしかにそれ以外にはない。

エリート、俺が八年前に絶対に勝てないと悟ったあの男のチーム。

エリートに上がればおそらく責任者の指揮からも外れるはずだ。

「……別に動きが強くなるために投薬を望むやつがいるなら俺は構わねえ。でも……出来ることなら、そんな姿は見たくねえ」

少し恥ずかしいのか後ろを振り向き、ぽりぽりと頭をかく。

そんな姿にクスクス、と笑う。

「つたく、普段滅多にあんなこと言わないのにツンデレか？」

「うるせえよ、ガキが大人ぶっても可愛くねえぞ」

それから俺たちは次の任務に備えての強化訓練を行った。

強化組も教官を筆頭とした訓練派と責任者を筆頭とした投薬派に分かれた。

次の任務が開始されるまでにどちらの派閥のチームの実力が上かを示すために実力派は危険種狩りを主としたエリートと同様の訓練方法を、投薬強化派は処刑の時間以外は投薬を行っていた。

そうした訓練が行われてから小さな任務はいくつかあったが、敵が警戒していたのはエリートばかりでこちらは雑魚ばかりだったためお互い一步も譲らないという状態だった。

時々投薬強化派の刺客もいるにはいたが、そいつらは変身で迎撃してやった。



そんな状態が数ヶ月程続いたのだが、埒が明かないと考えた現責任者が新たな任務を合同で行うように指示した。

内容はプトラって国の墓守を討ち取り、彼らが盗んだとされる財宝を奪還するというものだ。

まあ奪還というよりは盗むといった方が正しいのだろうと踏んでいるが、下手に発言して殺されたくはないので黙っておく。

次の任務を行うようために作戦会議をしようとした時だった。

投薬派の一人がこちらにやって来る。

偉そうにしているが、隙が多いな。

「ふんっ、頑張って生き残れるといいな！」

「そうだな、名前は知らねえけど……」

剣を抜き、首筋すれすれまで近付ける。

これに反応できないようじゃまだまだだな。

「なっ!? く、薬もなしで……」

「お前、今のが実戦なら死んでたぞ」

「――、ちっ！」

面白くなかったのか顔を真っ赤にするとそそくさと戻ってしまった。

あの程度で怒るとか情けねえな。

「……なんだったんだあいつ?」

「放っておけクソボンクラ」

「そうです、今はそれよりも作戦会議です」

ギンとウーミンに言われてとりあえず今わかっているプトラの地図を確認する。

……って、なんだこれ?

「……墓の地図ってたった一枚だけ?」

「どうせ境界の敵よ、一枚あれば十分って考えたんじゃない?」

ギンがそう話すが、帝国の兵がこの程度の情報量しか手に入れられていないのを見るとかなりヤバいのがいるに違いない。

こういうのは慢心すればするほど負けフラグが立つって金ピカの王様から学んでいる。

慢心ダメ、絶対。

「……今回の作戦は、かなり慎重に攻め込むべきだと考えている」

「はあ？そんなことしてる間にいいところ全部取られるだろう？」

「いや、俺の推測だけど全員動けば全滅の可能性が高い。もし仮に敵が帝具を盗んでいたとすれば、臣具すら持っていない俺たちがどうやって戦える？一つで一騎当千の力を持ってんだぞ？」

帝具はないにしても、ここまで帝国が攻めることが出来なかった理由があるはずだ。

それが分かるまでは不用意に近付けない。

「たしかに、敵がわざわざ盗んだ帝具を使わない手はないか」

「考えすぎな気はするけどね」

皆あまり納得がいかないって感じの表情だ。

たしかにあそこは昔ながらの国で帝国のように発展していないのだから余裕だろうと思うのも分かる。

でも、少なすぎる情報量や殺され続けた帝国兵の情報から考えてみると一筋縄ではいかないような気がするのだ。

「教官、今回ばかりはエリート同様に成績のいい七人には臣具を与えるべきじゃねえのか？」

「……ハチは今回の任務はそうするべきだと考えているのか？」

「明らかに今までの任務と比べて情報量が少なすぎるし、敵の領地内での戦闘だ。なんか嫌な予感がする」

考えすぎ？ゲーム脳？なんだって結構。

敵陣を攻める時はオーバーキルぐらいのほうが丁度いい。

「……分かった。成績の高い上位三名だけはなんとかならないか聞いてみよう」

「いや、だから七人ぐらいは必要だと……」

「言いたいことは分かる。けどな、そうなると不平等になるんだ」

教官はそういうとクロメ、ギン、ナタラ、ウーミン、レムスを指さした。

「成績上位者だけでいうなら全員入っている。俺のチームだけ臣具があるのは不公平だろ？」

「……は？」

「こればかりは全員が信じられないとばかりに耳を疑う。

全員が成績上位に入っているだつて？」

「つーわけでだ、その中でも優秀な成績のナタラとギンとクロメは臣具を用意してもらおうから期待しとけ」

教官はぶらぶらと手を振るとその場からいなくなった。

暫くしておっさんが刀、薙刀、大剣の三つの武器を目の前に用意し、俺に手紙を渡した。

それを開封すると教官が書いたのであろう文章が五枚も入っていた。

「えっと……こいつはクロメとギンとナタラが使えつてさ」

「本当か!？」

「これでまた一步エリートに近付けろ！」

その後は誰がどの臣具を使うかを平等に決めるためにじゃんけんを行った。

その結果、薙刀の臣具「トリシユラ」はナタラの手。

大剣の臣具「メタリテイ」はギン、刀の臣具「玉梓」はクロメの手に渡ることになった。

「私も欲しいなく」

「仕方ないです。この中でも三人はずば抜けて強いですから」

「ま、今後俺たちにも臣具が貰えるのかどうかは今回の任務次第だよな」

二、三、四枚目にはそれぞれの臣具の能力が書かれていたため、それを三人に渡す。

……最後の一枚は俺用に書いたものだと分かり、それをすぐにポケットのなかにしまった。

「最後の一枚はなにが書かれていたのですか？」

「ん？……まあ、秘密」

ウーミンが気になる仕草をしていたが、曖昧な返事で受け流し、話題を別のものに変えることにした。

「……よし、臣具の使い方になれる期間は明日の朝までだ！すぐに

プトラで任務が始まるからしっぴかり寝ること!!」

「なんだ、急に張り切ってるな」

「まあな、今回の任務は訓練派のリーダーが俺になったしな」

張り切ってそう言うど皆が固まった。

「……え、なんでそんなマジ？みたいな顔してるんだ？」

「……不安だよ〜!」

「ですね、凄く心配です」

「ド直球!」

「大丈夫、私はクソボンクラでも問題ないと思ってるから？」

「せめて疑問形取れよな!」

「……はは」

「なにか言えや!!」

「ミスしたら斬るからね?」

「やめて!?!その大事なナニを見ながら刀を抜くのやめて!!」

「こいつら揃いも揃って全く信用してないって……。」

「み、見てろよ!!てめえら明日には流石はっちゃんマジリーダーって  
いわせてやるからな!!」

ぷんぷんと走っていくと何も無いところで転ぶという恥ずかしい  
行為をしてそれを誰かに笑われて自室に戻って恥ずかしすぎて泣い  
たのはここだけの話である。

## プトラ遠征 一日目

翌朝、体調も装備も地図も全て確認出来たところで俺を筆頭に訓練派がプトラの地へと向かった。

道中敵が来ることもなく比較的平穏だったこともあつてかなりリラックスしてプトラに侵入に成功した。

そこらに死体がいくつかあつたことから投薬派が先に墓に向かった可能性が高い。

……けど、これだけ大きな墓なら中にいる敵の数を多いただろう。

一階以外は未知のエリアだからこの最深部に行くには少なくとも数日はかかるはずだ。

「墓に入る前にどこかで適当に一人捕獲しよう。そいつから情報を手に入れてここにある情報と一致してから突入するべきだと思う」

「別に構わないけど、投薬派が任務を終了させてたらクソボンクラの責任だからな？」

「考えすぎだったら俺の責任つてだけで済むから問題ない。数は少ない方が相手も油断するだろうからクロメと俺で敵を捕獲する」

リーダー自らってどうかと思うが多分これで問題はないはずだ。

レムスなら仕留め損ないがあるかもしれないが、基本的にこいつらは殺しかねない。

特にギンとナタラは手に入れた臣具で暴れたいだろうし。

「仕留め損なうレムスなら分かるけどどうしてクロメを？」

「ひ、酷いですよ！もう仕留め損なったりしませんから!!」

「……ははっ、それは置いておくとして、その臣具だからこそ試したいことがあつてな。運が良けりゃ使えるかもしれない」

「私の臣具が……つまり、そういうこと？」

「そゆこと」

残りのメンバーは絶対に墓に近付けないように近くのキャンプ地に留まらせる。

勝手に動いたら変身の力を最大限使うと脅しているからそう簡単に動きはしないだろう。

……と、いうわけで俺たちは墓周辺の探索を行った。

墓にどれだけ近付けば墓守が現れるのかを探るための観察でもあ  
るため一歩一歩慎重に動く。

「そーいやさ、エリートにいる姉ってやっぱ容姿とかそっくりなのか  
?」

「……どうだろう。今は会ってないからもしかするとすごく変わって  
るかも」

つまり、昔は似てる部分はあったってことか。

……大食いの要素とか似られると困るな。

こいつの食う量半端ないからなー。

「臣具も貰ったことだし姉に会えるのも時間の問題になってきたん  
じゃないのか?」

「……うん、その為に私はここまで頑張ってきたんだから」

クロメの姉に対する思いは普通ではない。

これがシスコンってやつなのか。

生前の友達が妹(姉)はお前の思っているほど尊い存在じゃない、夢  
を持ちすぎだとか言われたがこれを見る限りそんなに悪くはないん  
じゃないかと思わせる。

「……何か変なこと考えなかった?」

「いや別に?」

クロメって時々勘がいいのか悪いのか分からない時があるから心  
の中で考えるのも一苦労だ。

笑って誤魔化しながらお互いに戦闘態勢に入る。

……少しだけ風が強くなった瞬間。

「貴様たちも墓荒らし——」

「うるさい邪魔」

脚と首を斬り落として息の根を止めてしまった。

ちなみに、首をはねたのは俺だ。

……やっちゃまったなー!

「はっちゃん、言ってることとやってることが違うよ」

「す、すまん!!」

後ろを振り返ると新たに三人ほどいる。

よし、こいつらは生け捕りにしないとリーダーとしてのメンツがない。  
い。

「一人で突っ込んだあいつが悪いけど、瞬殺か……!」

「最初から全力で行くぞ!!」

墓守たちの姿が変わり、半人半獣のようになる。

これは教官の教えてくれた通りの内容だ。

「その技術は帝具や臣具でも利用されてるもんだ! 帝国が何も対策をしていないと思うなよ!!」

「援護お願い!」

俺が敵の攻撃を捌きつつクロメに攻撃を行わせる。

敵もワンパターンの動きじゃなくて空飛んだり跳ねたりして鬱陶しいが、一撃一撃は重いものではない。

「クロメ! 今だ!!」

「臣具玉梓、お願い!」

俺を足踏み場にし、一瞬のうちに敵全員に一撃を喰らわせる。

そのどれもはただのかすり傷で敵は余裕の笑みを浮かべているが、これでいい。

「よし、命令しろ!!」

「……お座り!」

クロメはそう命令すると敵は一斉に座り始める。

敵は何が起こったのか分からず、一瞬固まってしまった。

これが臣具玉梓の能力。

死体と人間以外のどんな生物でも一度斬りつければ解除しない限り自由に操れる臣具。

本来なら人間には利用できないのだが、大昔に帝具ライオネルを所持していた帝国軍人との戦闘で完全とは言えないが危険種の力を得ている人間は操れるということが分かっている。

「くっ、バカな!?! なぜ、我々が……」

「次の命令、ここの情報を全て教えて」

「誰がそんな……っ」

「は、墓の内部にあるトラップと内部の構造を教えればいいんだな？」  
酷く歪みきった顔だが、時間がない。  
さっさと吐き出させておこう。

「――以上が、墓の情報だ」

「全員同じこと言ってるし、何回か命令をキツくしても同じことしか吐かなかった」

つまり、メモに書き込んだことを全て持ち帰れば任務も本腰を入れて開始できる。

ただ、罠の数も多いからレムスが引つかからないように注意しておいたほうがいいな。

しかし、墓守にいるのに下つ端は知らないことも多いな。  
結局敵の情報は分からないままか。

「……最後に、ここに来たやつは全員どうなっている」  
「奴等は貴様たちの仲間か。……その殆どは死んだ、中にいる墓守は俺たちよりも遥かに強いぞ」

それだけを聞くとクロメに指示を出し、一人ずつ気絶させていく。  
多分俺たちが話すだけじゃ手柄の横取りだのなんだのと煩い連中もまだいるだろうから責任者に引き渡すためだ。

大勢いた投薬派のメンバーが殺されたとなると敵はかなりの数がいるか、ずば抜けて強いやつが数人ほどいる可能性が高い。

救援要請も出してもらえるように責任者に話をしてみてもよさそうだ。

「長居していると敵も湧いてきそうだな。さっさと撤退するか」

運べるだけ連れて行き、運べなさそうなのは全て気絶させておいてなんだか殺しておく。

なんとか捕虜は責任者たちに任せておけた。

中には墓から命からがら逃げ出してこれたやつも存在していて、その情報から責任者も慌てて増援を要請してしまっただらう。

提案する手間が省けたのは嬉しいが、そんな強いやつらにはたして



全員で勝てるのか？

やっぱり全員臣具持ちとかの方がよかった気がしなくもない。そんなこんなでプトラ遠征一日目が終わってしまった。

焦っても仕方ないとはいえ、さすがに森でバーベキューはどうかと思う。

あと、クロメには極力食う量を抑えてもらいたい。

危険種を絶滅危惧種にでもする勢いで狩ったのを食っていきやがるな。

「……それで、明日はどうするの？」

「明日も自由時間だ。動くのは援軍が来てからになる」

まあ、欲を言うのならもうちょい数が欲しかった気がせんでもない。

なにせ敵は危険種とかに変身するんだから厄介なのは確かだ。

「……あ、いつそのことエクスカリバーとか使って墓ごと破壊する手も」

「ダメだよ、何するか分からないけどあの墓の中には盗まれた財宝が沢山あるんだから」

ダメかー。

まあそうだよな、そもそも宝具の全力開放出来るのかな？

……あ、アーラシユはダメ。死ぬから。

「はっちゃん。援軍って誰がくるの？」

「多分選抜組だ。つまり、クロメの姉と会える可能性も高い」

それに加えてあの男も来る。

……まあいいか、数よりも質は圧倒的なのは確かだ。

それに、責任者のおったんの慌てようからして他にも呼んだに違いない。

可能性としては帝国云々だから羅刹四鬼とかか？

それとも……いや、それはないか。

「……はっちゃん、早くしないと肉なくなりますよ？」

「へ？……あー!!クロメそれ俺が取っておいた美味そうな危険種の肉ー!」

……まあ、今後のことは増援が来てから作戦は立てればいいのか。それまではリラックしておかないと無駄な神経ばかり使っても仕方ないしな。

このしばらくの休日を楽しむとしましょうか。

□ □

帰還途中に走ってくる男を見つけて何事かと問いただした。

どうやらプトラの遠征が思いの外難航しているらしい。

プトラ……そういえばその任務には面白い男がいるはずだ。

噂では奥の手を使えば私を超える強さだと聞いた覚えがある。

たしかその名は……

「……ハチ、だったか」

折角だ、私も向かうとしよう。

この帝具の力ももつと試してみたい。

そして、隙あれば……

一度、その男と一戦交えてみたいものだ。

## プトラ遠征 二日目

プトラのキャンプ地は意外にも食べれるものが多くていい。  
……それがこんなことになるなんて。

「……大丈夫か？」

「……だ、大丈夫、じゃない、かも……」

「マジかよ……」

クロメがお腹を壊した。

原因は昨日のシマウマみたいな危険種が原因だろう。

中々焼けるのが遅いからってちゃんと焼けてないの食べるからそうなるとは思っていた。

いるんだよな、ぱつと見焼けてるからって中まで焼けてるか確認せずに食べるやつ。

もしかしたら別の理由があるかもしれないけど、これもいい教訓にしておこう。

援軍はもう少し時間がかかるそうだが、それはそれで特訓の時間を設けられるから問題はない。

生き残りの投薬派も今は侵攻をやめて情報収集と訓練に集中しているらしい。

「仕方ない、今日は丸一日休日にしてゆっくり休むとしますかねー」

本音を言うと今日はかなり眠い。

毎日毎日任務と訓練ばかりじゃモチベーションの問題もあるし一日ゆっくりしても誰も何も言うまい。

「休める時に休んでおくのも重要ですからね」

「……それじゃ、私は素振りしてくる」

そう言うとギンは一人そそくさとどこかに行ってしまった。

臣具を使いこなすための練習だろうけど、やっぱりあれが使いこなすのに一番時間がかかりそうだな。

皆も心配そうな顔しちやって……よし、何か話題ふってやるか。

「そーいやよーナタラは臣具の使い心地はどうなんだ？」

「え？あ、ああ……伸縮自由っていうのは驚いたよ。慣れていけば遠距離戦の敵とも戦えそうだ」

「私も臣具欲しかったなく。出来れば可愛いのとこ〜」

レムスが心底羨ましそうに見ている。

可愛い……たしか帝具の話になるけど大きなハサミの帝具にパ  
ンダが付いてたような……名前なんだっけ？

「私も、トリシユラがよかった、かも」

クロメも倒れながら羨ましそうにトリシユラを見るが、現在クロメ  
の周りは羊の群れでモフモフ天国と化している。

凄く気持ちよさそうだ。

「お前は玉梓があるだろ？玉梓がないとそのモフモフは出来なくなる  
ぞ」

「……やっぱり玉梓が一番いい。使わなくなったら食料にしちやえ  
ばいいし」

さりげなくとんでもねえこと言ったなこいつ。

……てか、人と死体以外を操れる玉梓ってかなり強いのにこれより  
性能が上らしい帝具八房ってどんな武器なんだよ。

ここの帝具とかって頑張りや宝具化も有り得る性能だよな、普通に  
考えて。

「……私は、はっちゃんの使う宝具でしたか？あれを使ってみたく  
いす」

「宝具を？」

「はい。……初任務の時に使っていたあの槍、出来ることならもう一  
度見てみたいですし、使ってみたくです」

「たしかにゲイ・ボルグはカッコイイし何回も使えるなら使いた  
いけど……何が出来るかはランダムだからなー」

何ページか飛ばして読んだから見落としがあるかもしれないけど、  
読んだページにはランダムって書かれてたし諦めるしかないか。

「沢山の宝具を持つことは出来ないのですか？」

「それはねえけど……あ、バカみたいに宝具持ってるのいたな」

英雄王とか賢王とか贗作者とか。

……あれ、俺って英雄王とかになれたとして宝物庫から宝具取り出せるのか？

乖離剣とか天の鎖とか大丈夫？

天の鎖とか使える気がしないのだが。

「……投影魔術も使いこなせる気がしないし……むむむ……」

「はっちゃん？おーい、はっちゃん」

今のうちに投影魔術を学んでおいたほうが良さそうだな。

難しいのは分かるが、ウーミンが珍しく使ってみたって嬉しいこと言ってくれたからここはやってやらんと男が廃るってもんだ！

「……!?は、はっちゃん！はっちゃんってばー!!」

「もう……どうした？レムスも子供じゃないんだからそんな駄々こねたみたいにならぬ……よ……」

振り返った先にいたのは、いやあったのは二つのデカイモノだ。

即ちパイオツ、極上のパイオツだ。

ギンのも凄まじかったけど、目の前のパイオツは色気がある。

もうなんか……やばい。

「——ハツ!?だ、誰だあんた!!」

皆が距離をとっている中、俺だけ遅れて後に下がる。

青髪でパイオツ……じゃなかった。胸に変な紋章があり、歳は俺たちより少し上か同じくらい、なのかな。

そして、あの服装は以前帝都で見たことがあるから敵ではないのか？

「ほう、さつきまで胸を凝視していた男の目ではなくなったな」

「うるせーやい、見たところ帝国軍人だとして……」

そういえば、帝都には最凶の将軍がいたはずだ。

まだ若いのに帝国最強に相応しい実力を持ち、タチの悪いことにオネスト大臣側につく将軍。

「……まさか、エスデス将軍か？」

「よく分かったな。革命軍の人間だと偽って少しだけ遊んでやろうと思っていたが、残念だ」

エスデス将軍の後ろを見てみると馬がいる。

……たった一人で馬に乗ってきたのか。

「将軍を援軍で呼ぶとは、余程のモノがここにある……盗まれてるってことですね」

「……なるほど、貴様が例のハチか」

え、なんで将軍クラスの人がただの暗部の俺を知っているんだ？

てか、例のって何？俺なにかやらかした覚えはないぞ。

「エスデス将軍、その、例のってというのはどういう……」

「貴様の変身能力は私を超える力を秘めていると聞いたぞ」

誰だそんなこと言った野郎。

今すぐ出てこいぶっ殺してやる。

「……そう言われるのは強さを求める身としてはとても嬉しいのですが、帝国最強を超えられるとは思っていません」

「なら、試してみるか？」

あまりに一瞬だった。

突然俺の視界からエスデス将軍が消えたかと思えば、次の瞬間には目の前にその顔があった。

「うおっ……!？」

あと少しというところで回避し、距離を取る。

その間に全身に強化をかけ、戦闘モードに切り替える。

エスデス将軍は変身することを望んでいるが、明日まで令呪が一回消費されるから出来れば無駄使いはしたくない。

「……なんだ、使わないのか？」

「訓練で令呪は使わないって決めてるんです。それに、ランダムですから常に最強が出るとは限りませんし」

「なんだつまらん。お前と一戦交えれると期待したのだが……」

エスデス将軍の放つオーラが変わる。

……これは、殺気だ!!

「殺す気なら貴様も本気を出すか？」

「……ああもう！外れが出た時はその話は無しですからね!!」

本当は無闇に力を使うべきじゃないのだが、あっちが殺す気で来る

と俺も全力じやなきや大怪我をする。

頼むから強いのかい!!

「令呪を以て我が肉体に命ずる!!」

強いのかいのかいのかいのかいのかい!!!!

キヤスター以外でそう、願うなら……

——円卓の騎士!!

「……それが変身とやらか。たしかに、これほど恐ろしいと感じたのは初めてだ」

見てみると武器はないが服装と後ろの装飾品で分かる。

うん、間違っている。

これ円卓の騎士やない。けど、本気の出し方も分からなければ俺にどうしろと?と思わせる規格外サーヴァント。

……どうみても、覚者です分かります。

「エスデス將軍、ハズレです。ですから今回は一旦戦闘をやめて」

「そう言うな、一撃入れてみれば分かる」

「……ただ戦闘意欲高いんだこの人は!」

「し、仕方ない!とにかく強くなく無理もなくこう、ソフトな感じの一撃を!!」

「来ないというなら、こちらからいかせてもらおうぞ!!」

先程より速くこちらに近寄ってくるが、容赦なく顔面を蹴り上げて吹っ飛ばしてしまう。

……スキルの一つにあつたとはいえ、何故か頭の中に流れ込んできた。

なんだこれ、これがパ、パ……古代インド武術なのか。

てか、無意識だったとはいえ將軍の顔面キックはまずい気が……。

「……面白い……ここまで戦闘が面白いと感じたのは久しぶりだ!!」

と思ったが元氣そうに空中からこちら目掛けて落ちてくる。

落下の勢いに乗って氷の弾丸と共に蹴りを入れてくるが、飛んできた氷の弾丸を壊しつつ蹴りを受け流した。

エスデス將軍の攻撃を一撃も喰らうことなく攻撃を的確に当てていく。

こんなに凄いのなら宝具である転輪聖王はどれほどのものか……。

「——はっ!!」

ゲームではかなり使われていたビームを惜しみなく放出する。

エスデス將軍はそれを危険だと察したのかこれを回避。

当たった場所は……吹き飛んだ。

それはもう文字通り綺麗に自然が消し飛んだ。

……やつべー、こんな暴れたら墓守とかにバレるよ絶対。

「……」

あとさつきからエスデス將軍の表情がヤバイ。

愉悦の笑みから捕食者の表情になっているのが怖すぎてもう帰りたい。

「……なんの騒ぎだと思えば、エスデス將軍か」

こんな状況で出てくるなんて度胸あるなと思いつつ人の声のする方を見る。

「状況は把握したが、奇襲前に人を使い物にならなくするような行為はやめて頂きたい」

責任者とギンがいた。

ギンは俺に何か言いたげな表情をしているが、それどころじゃない。

本当にこれはまずい。転輪聖王使ったのは俺だけどこそのままじゃ殺し合いになれかねん。

「……いや、すまなかった。明日には任務を開始するのだな?」

「先程連絡がありました、明日には到着することです」

エスデス將軍はくるつと振り返ると冷気を放つ。

誰も近付いてくるなといわんばかりの冷たいものだ。

「……私を超えるなんてレベルではなかった」



なにか、聞こえたような気がしたがこれ以上追うのはよくない気がしてやめた。

……同時に、二度とセイヴァーは出てほしくないと思った。

## 大規模任務決行

セイヴアー事件から早一時間。

急いで戻ってきたギンを含めて全員から質問攻めにあつたが、俺もどうしてセイヴアーが出たのか分からないから色々と誤魔化してその場を凌いだ。

皆もまだ納得はしてなさそうだけど、俺自身覚者を使ってからかなり体の調子がよくないことを察してくれたのかあまり深くは聞かないでくれた。

……ランダムなのは知っていたけど、この能力はセイヴアーまで使えるのか。

つまり、ルーラーやアヴエンジャー、アルターエゴにウオツチャーみたいなエクストラクラスも召喚できるのかもしれない。

もちろんこれを嬉しいと思うがその反面懸念すべき点も山ほどある。

それを制御できる方法がないか女神様の本で調べたところ、そういうことは一切書かれていなかった。

この本に書かれてることって大体頑張ればできる云々が多いから俺の努力次第ではもしかすると変身できるサーヴァントも制御できたり、バーサーカーの狂化を抑えたり出来るのかもしれない。

……その練習を試してみたかったのだが、その直後に都合の悪い知らせが届いた。

援軍が到着してしまったのだ。

そのせいで練習することも叶わず、エリートたちと挨拶をするハメになった。

「……あなたに会うのはいつぶりだ？おつかねえおっさん。いや、ゴズキさんって呼ぶべきか」

「あんな無知でも生き延びる方法だけ知ってた子供が今じゃリーダーなんて驚きだ。クロメ、ギン、ナタラも臣具を手にして俺たちに近付

「いてきたんじやねえのか？」

エリート of 教官的存在であり、俺を拾った男。

帝具村雨使いにして元羅刹四鬼のゴズキ。

相変わらずこいつには生身で勝てる気がしない。

「ゴズキさん、あんたの部隊は？」

「あいつらならお前たちが持つてきた情報を頭に叩き込むためにヌカの所に向かった」

「……ヌカ？ヌカって誰だ……」

「いや、聞いたことはある気がするんだけど……身に覚えが全くない。」

「はっちゃん、今の責任者の名前だよ」

「……すまん、責任者がおっさんってしか呼ばないから名前忘れてたわ」

俺ってばうつかりさんだな。

一応今のところは帝国の人間だし人の名前ぐらいは覚えておかなくちやな。

「……しっかし、エリートも大変だな。こんなところまで来させられて休憩する間もなく情報収集なんて。」

「……んじや、任務は今夜にでも開始する感じか？」

「そうだな、ここに長く時間をかけるわけにもいかねえ」

ゴズキは多分俺のことを怪しんでるはずだ。

最初の出会いが他のみんなとは違うから出来るだけこいつに関わりすぎないようにしたい。

日常生活も死と隣り合わせなんて御免だな。

「そんじや、先ずは挨拶に行ってくるわ」

ゴズキとの挨拶が済ませ、俺たちはエリートたちのいるであろうテントに向かった。

「……お、あれじゃね？噂のエリートたちは」

あきらかに臣具って分かるの持つてる人間の集団を見てすぐにエリートだと分かった。

特にテントの奥にいる腕組み野郎は一番強そうだ。

それでもつて、情報と違つて一人足りないのを見るとおそらく任務の途中で死んでしまったのだろう。

「……お姉ちゃん!!」

「!く、クロメ!?!」

クロメが突然叫び出したかと思えば、あの中にいた黒髪も走り出してお互いに抱きついた。

……あー、あれが姉のアカメか。

確かにクロメと似てるな。

「よかったですね、姉に会えて」

「この任務が終わったら再開パーティーだね〜!」

「……そんな呑気な……。」

クロメは姉との再開を果たしたことで完全に話しかけにくい雰囲気を作り出した。

……まだ自己紹介済んでねえから勝手に二人の世界に入られてもなー。

「……えーつと、気を取り直して。俺がこのチームのリーダーだ。はっちゃんって呼んでくれ」

「ナハシユだ。噂には聞いていたが……」

ナハシユがこちらをジロジロと見てくる。

……あー、無理。堅苦しい会長タイプの雰囲気かしてあんまり話したくない。

「しつかりしろクソボンクラ!」

「そうです! 仮にもリーダーがたじろいでどうしますか!!」

「は、はっちゃん頑張つて〜!」

「ほら、リラックスして」

こ、こいつら他人事だからつてー……!」

でも、舐められるわけにもいかないのは確かだし……。

「……俺たちのチームはエリートと肩を並べられると思ってる。だから余計な気は使わず任務を遂行してくれ」

「言われなくてもそのつもりだ」

「ごめん、やっぱこういうのは無理。」

いい感じの言葉が見つからない不甲斐ないリーダーですまない、本当にすまない。

「一つだけ聞きたいことがある」

「……なんだ？」

「ここに向かう途中で見た爆発は、お前がやったのか？」

爆発と聞いて思い浮かんだのはさっきのセイヴァーでの一撃だ。

あれってそんなヤバイ感じだったのか。

……てことは、エリートが今日到着したのは俺が原因だったりする？

「……能力の一部が暴走したのが理由だ。以後気をつける」

当面の目標はクラスを自分の意思で選べるように出来ることだな。

かなり難しいだろうけど不安要素は絶対に潰す。

それから他のみんなと色々話をしてみたところ、エリートたちは見たところ全員が帝国万歳状態ってわけではないらしい。

帝国に疑問を持つてる感じなのはメガネ男。

名前はグリーンで、強化組のことを怪しまれないように探っていたことからいつもまだ確認ではないだろう。

クロメの姉であるアカメも「投薬の話は本当か？」なんて質問してきたから「この国をどう思ってる？」と質問に質問で返したところ、動揺を隠しきれていなかった。

「……クロメたちは薬なんか頼らなくても私たちと同じくらい強くなれると証明した。なら、危険を冒してまで投薬に頼る必要があるのか？」

「今の帝国に必要なのは革命軍と戦える即戦力だ。薬で簡単に強くなるなら、そいつがどうなろうと知ったこっちゃないのさ」

だからこそそんな非人道的行為が許されるこの国は……オネストは処刑されるべきだ。

オネストさえなんとか出来れば自然と帝国の腐敗部分も排除されていくはずだ。

「このことはゴズキには話すな。妹が大切で、自分の命が大切ならな」  
「……分かった」

ゴズキにバレれば確実に俺は始末される。  
俺だけじゃない。色々調べられて教官やクロメ、最悪俺たちの  
チームが全員始末される可能性すらある。

……アカメは顔に出やすそうだからバレなきやいいけど。  
「よし、顔合わせは済んだな。令呪を一面使ってるから不安は残るけど、任務を開始する！」

思ってた以上の大規模な作戦になったため、エスデス將軍には周りの雑魚を任せる。

あの人が暴れたらこちらに戦力を回す余裕が無くなると予想してエスデス將軍が突入した五分後に墓守の長がいる場所に向かう。

クロメの玉梓で長を大人しくさせて楽に殺せたならそれでよし、ダメならエリートたちを援護する形で全員で仕留めに掛かる。

よし、作戦通りに進めば完璧だ。

これだけの大人数なら多少の想定外もカバー出来る。

「一気に仕留めるぞ!!敵は、プトラの墓にあり!!」

悪く思わないでくれ。

財を持ってしまったことを呪ってくれ。

そして、潔く倒されてくれ。

……こんなことを考えてしまう辺り、俺も堕ちているのかもしれないと考えつつ、プトラの墓へと向かった。

報い

プトラの墓守たちは全員今までの任務では戦ったことのないような強者で、俺たちの集団戦法が効かないような敵ばかりだ。

「ぐあつ!？」

「か、数が多すぎる……!？」

「——將軍のほうに戦力が集中しているとはいえ、雑魚ばかりだな」

……敵ばかりのはずだが、援軍として来てくれたエリートが強すぎてそう実感することは殆どない。

ナハシユの基礎値高すぎね？絶対成長したら化けるな。

「あとは罨さえ少なけりや完璧なものよ……!？」

隠しトラップがあることは分かっているけど、数が多すぎる。

なんでこんな多いんだよ！

「んでもってゴズキさんはなんで来てねえんだよ!!？」

絶対あれだ、俺を怪しんで監視してるパターンだ。

だからって、傍にいないと怖くてヤバいんだよおい。

「ああもう！ゴズキさん、基本的に俺らに任せるって言ってたけど表にぐらい出てくれても……。ん、地響き……?？」

突然の地響きと同時に何か転がってくる音が聞こえる。

一体何が？

それはもちろん、こういう時のテンプレトラップ。

「あ、あれって……!？」

「……大玉だあ!!!？」

「逃げるぞ!？」

急いで走り、大玉から逃れられる場所まで退避した。

そして、逃げ続けていると気付けば左に通路があったためそこに逃げ込んだ。

「……全員無事か?？」

……あれ? いない? 誰も?

まさか全員バラバラになったのか!?

「敵も考えやがったな……!」

肉体に強化魔術を施し、急いで大玉が転がった先に向かつてみる。いくら俺たちを分担させたところですが、すぐには殺さないはずだ。生け捕りにして人質としてどこかに置くはず。

「誰かいないか! いたら返事してくれ!!」

急いで走っていると微かだが様々なところで戦いの音が聞こえてきた。

誰が誰と戦っているのか分からないけど、誰かを選ばないといけない。

だが、一つだけ確かに聞こえた声があった。

「……すまん、みんな無事でいてくれよ!」

その声が出した方に向かって再び走っていく。

もし、この選択が間違いだったとしても放つてはおけない。

……臣具も持っていないのに一対一は無茶だ。

「……ウーミン!!」

「はっちゃん!?!」

「仲間か……」

既に連れ去られようとしていたウーミンを敵から引き離し、距離を置いて横にさせる。

「よく耐えたな。あとは任せろ」

「敵は……バツタです……気を、つけて……」

目を閉じてしまったが、吐血した様子もなければ腹に一発大きい一撃をくらって気絶しただけに見えた。

念のため治癒魔術をかけておき、ここまで行儀よく待っていた男のほうに振り向いた。

「待ってくれるなんて優しい野郎だな」

「雑魚が一人増えたところで勝敗は決まっている。貴様を殺してその女を連れていく」

ウーミンの言葉から察するにあいつはバツタの脚力を手に入れているのだろう。

バツタの特徴なんてその程度だ。



「本当は一日に二度も使いたくないんだ。でも、ちよつとだけ怒ってるから特別だ」

令呪の準備をし、二画目を発動する準備をする。

この強者気取りの野郎に絶望を与えてやろう。

「令呪を以て我が肉体に命ずる!!」

今回の変身はすぐに体がその力を理解した。

両手には何も持たない。だが、決して失敗ではない。

これなら問題なく倒せるだろう。

「……来い」

「ふっ、この女程度の実力が何人来ようが我々の敵ではない!!」

バツタが高速でこちらに向かい、どこから狙ってくるのか分からないほど動く。

……それだけだ。

「特別講義といこうか。魔術をその身で味わえ!!」

火や風を使い、バツタの足場を崩しながら距離を置かせる。

バツタは隙を見つけては攻撃を仕掛ける素振りだけを見せるものの、魔術を警戒してかさつきより動きが鈍くなる。

そこで火や風ばかりを単調で出してみても隙を与える。

「どうした、バツタだから火が怖くて近付けないか？」

「……舐めるな!!」

バツタが動き回るのを止めてこちらに一直線に向かってくる。

それに合わせて俺も攻撃の準備をした。

「その攻撃はもう見飽きた!」

「ふっ、簡単すぎるな」

一斉に放たれた三本のレーザーにバツタの脚が直撃し、狙いが俺から外れる。

それを見逃さず剣を振ってみるがそこまで上手くは行かない。

「……今の際を作るために敢えて同じ攻撃をしていたのか。だが、あと一歩だったな」

「挑発までして隙を作ったというのに、空気の読めない奴だ」

再びレーザーを放ち、目の前で爆風を起こす。

次の攻撃に移らずにそのままウーミンを抱えて後に走った。

「バカめ!!逃げるつもりか!」

「今の俺は軍師だ。無茶な戦いは得意分野ではないんでな!」

火や風、時にはレーザーも使つてあちこちを動き回る。

狭い道なんかを作つたりしているためバツタも本来の実力を出し切れていない感じだ。

「逃げ足だけは一丁前だな。それがいつまで続くかな!!」

「……これだからキャスターは出来ることなら出てほしくないんだ!」

柱を崩し、地面に亀裂を入れ、あらゆる魔術を試してみても敵に致命傷はない。

それどころか、次第に傷すら付かなくなる。

「この……!」

「その技は見切った」

風の魔術も放つてみるが受け流され、逆に風の力を利用する形で接近してくる。

もはや一撃は免れないと咄嗟に防御をした。

「やはりこれが貴様の限界か」

「あぐう……!!」

渾身の蹴りが入るとアニメなんかでよく見た事のある吹き飛び方で壁まで吹っ飛ばされる。

「……かはっ!?!」

ウーミンに傷はないものの、かなり重い一撃のせいでかなりの血を吐いてしまった。

「これでお終いだ。貴様は生かしておくど障害になりかねんからここで確実に仕留める」

「……そうか」

地形、敵の攻撃パターン、心理状況、全てが揃った。

俺は天才でもなければ大軍師でもない。

きつとエルメロイ二世のようにはいかないのだとしても、その宝具の特徴だけはしっかりと把握している。

「……宝具発動」

バツタに聞こえないほど小さく、眩くように言葉を発し、宝具を発動させた。

上空からはかなり昔なら見慣れていたあの柱が現れる。

その範囲は、俺が逃げ回っていた範囲全て。

「これこそが、大軍師の究極陣地!!」

危険察知したのか、その場所から逃げようとする。

だが、遅い。

「破れるものならやってみせろ!——石兵八陣!!」

バツタは石兵八陣の中に消え、ここに向かってくる気配はない。

その隙に俺は全速力で逃げた。

俺の力じゃ敵を殺すまでにはいかないだろうし、今の内に遠くに避難して身を隠すしかなかった。

そうして走り続けていると、血痕が見つかった。

仲間がやられたかもしれないし急いで駆けつけてみたが、実際にあつたのは首の飛んでいる墓守の死体だけだった。

他に何か残っていないか調べてみると、墓守の死体を踏みつけてしまったのか、血の足跡が奥に続いている。

まだ近くに仲間がいるかもしれない。

「……探してみるか」

足音も聞こえないが、血痕を頼りに再び走った。

血痕は意外とすぐに消えているため、そこからは無我夢中にあちこちを探し回った。

「……あれ?」

「目が覚めたか? 早速で悪いけど、立てるなら走るぞ」

孔明の変身も解けた時にはウーミンも目が覚め、大体の状況が飲み込めたのか特に何も言わずに立って一緒に走った。

「……皆無事ですかね?」

「あいつらが負けるはずがねえ。エリートも一緒なんだぞ」

走って走って走り続け、誰とも合わずに時間だけが消えて行く。

……出来れば、このまま終わってほしいと思っていた。

そうしてあのエリートリーダーが敵を倒してくれれば――。  
ベチャ

「……は？」

突然だった。

横から何か液体のようなものが付く。

それを触つてみると、赤く、何度も臭ったことのあるモノが……血が、付いていた。

たった今、俺の隣で誰かが死んだのだ。

嫌な汗があった。

振り返ろうとして、何も問題のないウーミンの姿がある。

よかった、俺の思い違いで。

……なんて、思えるはずがない。  
だって

「……一歩遅かったのお」

転がってるのは

「嘘……レムスが……」

レムスの、死体……。

レムスが、死んだ……？

「お、おいレムス……。助けに来てやったぞ！だから目を覚ませよう！」

「無駄じゃけえ。そいつは死んどるわい」

死んだ。

そうハッキリと聞かされた。

こんな裏世界だ。報いを受けることは分かっていた。

……でも、まだ早すぎるだろうが。

レムスは幼い頃、幸せな家庭で育っていた。

帝国が平和になればまたあの日々が戻ってくると信じていて、こんな世界でも戦ってきた。

報いを受けなければならいのはレムスが先ではないだろうが……

!!

「……す」

「殺して、やる……」

令呪を以て、我が肉体に命ずる。

「殺してやるぞオ!!!」

この男に絶望を。

## 迷い、決断

### ■アカメ視点■

私は、どうするべきなのか分からなくなっていた。  
プトラの墓守を葬る今回の任務。  
強化組が苦戦しているというこの任務のお陰で妹のクロメと再開を果たすことには成功した。

……成功したのだが、クロメから発せられた言葉は全て帝国の闇の部分だった。

クロメたちを育てた教官は隠れながらの反帝国主義者であり、クロメたちのリーダーのハチも昔から教官と同じ考え方だったらしく、クロメも帝国の異常さを私に語ってくれた。

……たしかに貧困の差を見た時に少しおかしいと感じたことがなかったわけではない。

クロメの口から迷いのない言葉が発せられたのなら間違いない。

だが、まだ私の心は迷っている。

疑惑が確信には変わりきっていないのだ。

クロメが騙されている可能性だってある。

だから、任務が終わって暫く休みが出来た時には……。

「……………!!」

「……………これは……………」

墓全体に届くのではないかという雄叫びと共に壁が壊れる音が聞こえてくる。

仲間がやられている可能性が高い。

まだ誰とも合流していなかったために不安が大きくなる。

「……………こっちかー!」

声のする方角に駆けつける。

クロメ、無事でいてくれ……………!

「■■■■！」

「ぬう！まともな思考と言語能力を失って力を得たか……！」

私が辿り着いた時には既に戦闘は激化していた。

あの叫び声は敵のものではなく、様子がおかしいハチから発せられたものだを知る。

ただ目の前の標的だけを狙い続けるその動きに無駄は多く、しかしその一撃は受け止めることすら不可能と思えるほど力強い。

もし、ただの兵士がこれを見れば彼を理性を失った狂戦士と呼ぶのかもしれない。

……だが、私はそんな彼を見て『復讐者』のように思えた。

「こうも硬いと呪い殺すのが手っ取り早そうじゃのう！」

「■■■■！！」

逃げ続けていた足を止め、杖を投げ飛ばしてハチに斧を手放させる。

「■■■■！！」

それにと引き換えにハチの強烈なラツシユが墓守を襲い、頭部を狙った懇親の一撃で吹き飛ばした。

「■■■■！！」

「まさか……ハチがダメージを受けているのか!？」

墓守が反撃をした様子もなかった。

だというのにハチは全身から血を出して膝をついている。

「これが呪いじゃよ。強ければ強いほど呪いはよくキク……貴様もある男みたいなタフそうじゃから確実に殺すけのう」

「くっ……」

今助ければ間に合うかもしれない。

……だが、呪いの攻略法が分からないのにどうやって対処すれば……！

「■■■■……ぶ、だ……」

ハチが起き上がるが、今にも死にそうだ。

なのに大丈夫なんて……。

「……今、言葉が……」

「心配、すんな。俺の体が別のものに書き換えられそうだけど……、あと十回ぐらい死ねる……っ!! ■■■■■!!!」

突然ハチの傷が感知したと思えば、再び理性を失ったように叫び始めた。

その姿を見て驚いたのは私だけではない、墓守もだ。

「バカな!? なぜそんなピンピンしちよる!!」

「■■■■!!」

……それから、二人の戦いは激化する事は無かった。

墓守の攻撃は最初こそ効いている様子だったが次第に攻撃を受けなくても平気そうに墓守を殴り殺そうとする。

「ぬっ……呪いの効果は……」

「■■■■!!」

「ちっー!」

呪いで致命傷を受けてもハチが死ぬ様子はない。

もはや一方的な暴力に墓守が耐えるかハチが力尽きるかの状態になった。

腕の骨を折り、頭を潰し、なのにあえて敵を斬らず、心臓を潰さず一方的に殴り続けた。

それが三回続き、その頃には既に墓守は立っているのがやっとうい状態だった。

「……■■■■……はあ、俺自身三度も死ぬとは思わなかった

……」

「ゴフツ……化物、め……」

ハチも力が解除されたのか最初に出会った時のように笑ってみせた。

体はボロボロで動いているのがやっつとのように見えるが、すっかり生きています。

「我等の負け、か。あの女子も他の墓守を倒しに行ったし、上では別の化物が暴れ回つとるけのう……。化物一人相手ならまだしも、こんな二人は手に負えんわ」



「……墓守、死ぬ前に教えろ。俺たちはお前たちが帝国から盗んだものを取り返しに来た正義か？それとも墓の財宝を奪いにやってきた悪か？」

「……答えは一つ。お前たちは、大悪党じゃけえ」

ハチから出た質問にしっかりと、迷いのない怒りの言葉が突き付けられる。

だが、ここの奴等は帝国から財宝を盗んだと聞いていた……。

「……殺したのはあんただけど、そもそも帝国が腐ってなきや死ぬことすらなかった命つてことか。……笑えねえよ……」

「……」

私は何も言えなかった。仲間を失った気持ちは痛いほどよく分かる。

でも、どうしてハチはこうもあつさり墓守の言ったことを信じたのだ？

「ハチ、どうして墓守の言うことをそんなに……」

「初めから帝国のことなんざ信用してねえからな。帝国がここの財宝欲しさに俺たちを利用したにすぎないだろうさ……奴らからすれば、俺たちの命なんて駒みたいなものだ。なんとも思っちゃいねえ」

「なんじゃと？なら何故帝国側に……」

「……少し前まではどうするか決めかねてたんだ。でも、今回の件で答えが出た」

ハチが奥に進むと一人の死体を抱き抱えて戻ってきた。

……レムスだ。

おそらく、呪いで死んでしまったのだろう。

「俺は、革命軍には入らん。ここにいる誰かと敵対なんて、出来ない」

……もし、ハチのいない世界が存在していたのだとすれば、私はどうしたのだろうか？

クロメと革命軍に入っていたのか、それとも暗部に残る決断をしていたのか。

「俺は将軍になる。将軍になれば色々使える権限は増えるだろうか

らな」

私には分からないし、もしもの話なんて必要はない。

「そして、諸悪の権化であるオネスト大臣を葬り、民が笑顔になれる……いや、そんな大きくなくてもいい。大臣に利用されて苦しめられるやつらがない帝国を作り上げてみせる!!」

だが、一つだけはつきりと言えることがある。

「アカメー！民の為なんて言わない。仲間が裏切られない、笑って明日を迎えられるような国を作るために、手を貸してくれないか!!」

私は、クロメと笑いあつて明日を迎えられる世界を望んでいる。

だから、ハチの差し出した手を握った。

もしこれを断っていたとしても、もう私は父と以前のように接することは出来なかつただろう。

おそらく、これは運命なのだ。

ならば、それを受け入れよう。

……それが父を裏切る行為だとしても。

## リスタート

「――以上がプトラの墓での出来事です」

責任者に複数の書類を提出する。

今回の任務はエリートと合流し、エスデス將軍もいたというのに二日も掛かった。

死者は多数。

その中にはエリート組だったガイの遺体もあった。

ガイは同じエリートのツクシが回収したみたいだが、かなり辛かったのだろう。

……だが、エリートが失ったのはガイだけじゃない。

一日目、あの時俺は墓守の長を倒した。

あの後自分から長を名乗っていたからな。

長が息を引き取るとすぐに墓が崩壊した。

墓の外に出たあとはレムスを失ったものの他は全員無事だった。

……でも、俺の考えは大きく変わった。

最初は革命軍が決起を起こすまではなんて思っていたのに、レムスが死んでからはこんな国を一日でも早く変えなければならぬと思っただ。

思っただ以上に仲間の死は辛いわ……。

「……ゴズキさん、まだ中にレムスを殺した長がいる。あの長は受けたダメージをそのまま相手にも与える厄介な相手だ」

「それが墓守の呪いだろうな。どうりで全滅させられるはずだ」

「アカメの臣具でじわじわ斬り殺すのもありだが、手取り早くなら貴方の力を借りたい。アカメが少しだけあいつを斬ることに成功したけど、相手にも与えるのはダメージだけで呪いや能力は返せないよ  
うだ」

「……確かにそういうことなら村雨で軽く斬ってしまえば終わりだな」

俺は嘘をついた。

辺りは既に暗く、俺の令呪は一画復活していた。賭けになるが、ゴズキを殺すために一对一の状況を作らなければならなかった。

この男も大臣側の人間。ならば先にここで殺しても後から殺されるのも変わりはない。

変身に失敗すれば諦めようと考えていたこの計画は呪腕のハサンが出たことで無事に成功。

「……おい、どこ見たって死体ばかりじゃ……」

「――妄想心音」

俺は、ゴズキを暗殺した。

上には彼の死因は墓守の長の呪いを受けて殺されたと説明し、羅刹四鬼すら呪い殺されると噂を流して暫くはこの墓に近付けさせないようにした。

村雨もそのついでに壊そうと思ったのだが……。

「こうして見ている分には美しいな……」

「……おい、本気で言ってるのか？」

なんと、アカメと村雨の相性は良いことが判明した。

帝具持ちが仲間にいるのはありがたいことだし、それが一斬必殺の妖刀ならわざわざ捨てるわけには行かない。

アカメは、帝具使いになった。

同時にエリートの新隊長はナハシユに代わり、ウーミン、クロメ、ナタラ、ギンが新たにエリートに加わることになった。

だが、エリート再編となると再び訓練期間が設けられるだろう。

長く見積って一年、少なくとも一週間……。

俺もそこに加わることは出来たが、それはしなかった。

そして、程なくして俺は暗部を抜けた。

アカメは察してくれるかもしれないけど、他はどう思うだろうか……。

「……一年ほどはかかると思う。それまで皆生き残ってくれ」

……將軍になれる条件として、功績と実力が必要になってくる。  
実力は絶対だが、功績に関してならこの国では大きく時間をかけず  
に済む裏技が存在する。

「……くっ、殿下！」

「この……これ以上、何を奪おうっていうんだ！屑共めえ!!」

中学生ぐらいの少年と傭兵を取り囲む盗賊もどき。

盗賊とは言ったが、こいつらは大臣の息がかかっている。

動きが拳法やってたやつ動きだし、隠す気なさすぎかよ。

「——やあやあ盗賊さん、」

無数の魔物を召喚し、そいつらに盗賊を襲わせる。

この場にいる全員が怖がってしまったけど、俺は味方だって信用を  
得る必要があるな。

……なーんでこんな時にキャスターのジルが出ますかね？

そりや他の戦えないキャスターに比べりゃマシだけど……うーむ。

「まあ、男に触手プレイなんて誰得だよ……」

決して殺しはせず、全員を拘束する。

……この宝具は俺の魔力じゃねえからぼんぼん使い魔出しても疲  
れねえし便利だなこれ。

「さて、誰の差し金でここに来た？言えば命だけは助けてやるぞ」

「だ、誰がお前みたいながきに……!」

口を割らないかー、そうかー。

……じゃあ仕方ないよな。

「殺れ」

一人を殺した。

ミンチより酷いとまでは言わないが人が殺したとは言えない死体  
になっている。

「もう一度言うぞ、誰の差し金だ？」

「わ、分かった!!話す、話すから命は助けてくれ!!」

話すといった男の拘束を緩める。

「……くっ、ククク……バカ——」

「そういうのいいから」

片腕を使い魔に潰させ、脇腹を短刀で刺す。

典型的なモブ敵かよこいつ。

「で、話さないなら皇族の血が流れているこの方に手をかけた罪でこのまま殺すけど?」

「だ、大臣だ!俺は大臣の命令で来たんだ!!で、でも知らなかったんだ!!!」

「……知らなかったで何でも許されると思ってるのか」

盗賊を皆殺しに、変身を解く。

……すつげえ警戒されちゃったなこれ。

「失礼ですが、貴方がバロン殿下で宜しいですか?」

「……執事も護衛も僕のことを殿下と呼ぶが、父も母も処刑され、皇帝の座もオネストによって断念させられた。今の僕はただの落ちこぼれ……負け犬の貴族にすぎない」

「なるほど」

オネストの野郎、今の地位につくまでに色々やらかしてやがったな。

多分、皇帝の両親が死んだのも……。

「……皇帝になりたいと思ってますか?」

「あいつがオネストの悪に気付き、この国を良くしてくれるなら僕がいる必要はない。……だが、あのまま傀儡になっているのなら……」

「その為には我らの味方となってくれる存在が必要になる。……それが大臣に見つかったのだろうか」

……まだ生きている皇族の血を持つ人でやっと正解だと思える人を見つけた。

誰かの言いなりで動いてるわけじゃない。

今までのやつらは傀儡か正気を失った者、未来を見据えない復讐鬼ばかりだったからな。

「殿下、私が貴方を王にしてみましよう」

「バカ言うな、貴様一人に何が出来るというのだ!!」

「ええ、私一人の力なら取るに足りないものです」  
令呪を一面使う。

……最近令呪を酷使しすぎだな。  
肉体的なデメリットがないのありがたいところか。

「ですが、私は様々な英雄の力を扱うことが出来ます」

正直こういう時にキャスターが出るもんだろ。

よりによって素振りで見せる時にこんなサーヴァントは……。

「で、殿下!!遠方から大臣の刺客と思われる賊が!」

「くっ……おい!契約条件は?!」

超絶ナイスタイミング!

これなら心置き無く宝具を発動できる。

「宝具展開——偽・王の軍勢」

俺には過去に率いた軍もいなければ慕ってくれた者もない。

故に召喚されるのはシャドーサーヴァントの出来損ないがいいところだろ。

「俺の願いは一つ——」

この場にいる奴等を全員固有結界に引きずり込む。

……もし俺が革命軍に入ると言ってしまうえばツクシ、ポニイ、ナハシユが敵となって仲間同士の殺し合いが始まるだろう。

ウーミン、ギン、ナタラだって教官から帝国の闇を教えてもらって  
るけど帝国を裏切るかわからない。

仲間を失ってこんなに辛いのに、殺し合いをしなければならぬ  
可能性があるなんて想像したくもない。

だったら、あくまで帝国側の人間として第三勢力を作ってしまう  
ばいい。

「——俺をバロン殿下直々の將軍として仕えさせてくれ!!」

——魑魅魍魎蔓延る帝国には、とある噂があった。

瞬時に万を超える兵を呼び出し、光の斬撃を放つ剣を持ち、異形を

従える能力を持つ人間がいると。

誰もその噂を信じる者などいなかったが、ある人間が口を開いた。

そんな人間がいるとすれば、ブドー大將軍かエスデス將軍、

——またはハチ將軍クラスなのではないか、と。